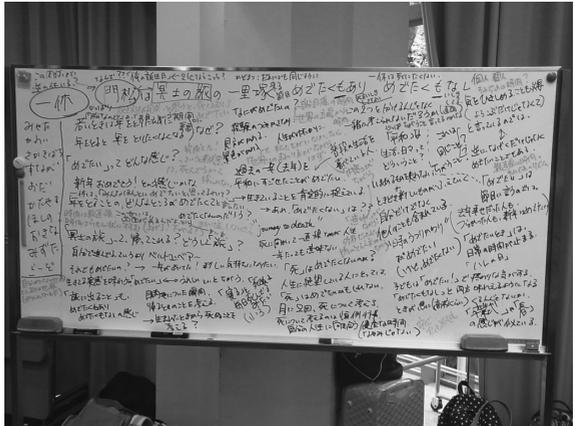


サマーキャンプ



二日目のグループワーク
(2014.7.31)



一日目の対話の板書
(2014.7.30)

高校生のための哲学キャンプ

～思考することの喜びと「問い」の大切さ

佐藤 麻貴

高校生のための哲学キャンプ（夏に開催）と、国際哲学オリンピック代表選考会の直前強化合宿（冬に開催）にチューターとして関わらせていただくようになってから三年目になる。全国から集う多くの高校生たちとの哲学的思考を通じた触れあいを心から楽しみ、当の高校生たちよりも、彼らと会えるのを心待ちにし、彼らとの創造的な議論を毎回、心から満喫し、楽しませてもらうと同時に学ばせてもらっている。高校生のための哲学キャンプに、ここまで虜にされているのは、彼らの生き活きた姿や考えている時の真剣な表情、眼差しに触れられることに幸せを感じると同時に、私自身が高校生だった時に、このような素晴らしい機会があったらどれだけ楽しかったらどうかと、心底思うからだ。

「課題に対し、自分の頭で解釈し、考えたことをまとめ、論理的に展開することによって他者に示し、他者からフィードバックをもらう」。こうした当たり前の活動を、日本の教育システムは阻害しているのではないだろうか。私は、自分が今まで受けてきた日本の義務教育において、幼い頃から常々疑問に感じていたことがある。「なぜ、国語の物語や小説の解釈には、単一の正解があるのか」という疑問だ。正解があるということは、教師が読みたいようにしか、あるいは教師が読むようにしか、物語も小説も読んではいけないということの示唆であり、そのような画一的な解釈を子供に強制することによって、子供の感受性や新たな解釈の在り方を、日本は教育システムの中で否定し、より均一性や統一性を重視した方向性にむかっているように思い、反発ばかりを感じる生活を送っていた。幸い、私が大学入試を受ける頃には、小論文を受験システムに取り入れる大学も増加し、高校生になった頃の私は、論述や小論文が得意な高校生として、日本の教育システムの中で生き延びることができた。しかしながら、私が自由に自分の考えを述べ、自分の感受性に基づいた議論を展開することができるのは、小論文の中だけであり、他の教科に関しては、必ず正解があり、自分独自の考え方や独創性を発揮することのできる場は非常に限られていたものだったように思う。

現代の高校生諸君を見ている、私が高校生だった頃とあまり変わらないのかもしれない。与えられた課題文に対し、最初は、課題文から連想されるキーワー

ドを述べたり、自分の考えを述べることすらおぼつかない彼らだが、「自分の頭でしっかりと課題文を受け止め、解釈し、そこから連想されることを考え、自分の日常と連動させることによって、問題を活きた問題として再解釈し、そこから独自の論点を展開していく」。こうした一連の作業をキャンプ開催中に数回経験してみると、そうした創造的な活動がとても楽しく、刺激的で、他の教科にはない面白みや深み、時には悦びや達成感をもたらすのだということに気付くようだ。彼らと触れ合っていると、たった二日間の合宿にも関わらず、驚くほど早くそうした思考の力を身につけ、思考することの喜びを、彼ら自身が実感し、楽しめるようになっていくことを確信する。その驚くほどの習得の速さと、課題に取り組む際の集中力を目の前にすると、彼らが、思考の世界において自由に羽ばたける機会を、日頃から、ものすごく欲しているのだということに痛感する。

哲学キャンプに参加して都度、思い、感じるのは、高校生たちはしっかりと彼らなりに世の中の動きを察知し、社会を観察し、自分たちも社会の一員であると自覚した上で、問題をしっかりと受け止め、考えようと必死で努力しているということだ。こうした姿勢に、都会出身の高校生、地方出身の高校生に、大した差異は無い。勿論、論じ方のテクニックに対する慣れ、不慣れは見受けられるが、哲学的に思考するという態度、また問題に向き合おうとする情熱そのものに、差異は全く見受けられない。高校生たちが、目を輝かせながら、徹夜までして、色々な話題について哲学的思考を展開していく姿を見ると、日本もまだまだ大丈夫なのかもしれないという期待が持てるのだ。彼らが哲学キャンプで悩みながらも、頑張っている姿は、一般的に、一定の情報（あるいは問題）に対する受動性と応答性が重視され、そうした能力が求められている現在の義務教育制度に対し、それにあたかも反発するかのような、飽くなき知的探究心を体現している姿のように見受けられる。哲学対話をしている時の彼らは、自らの力で考え、その考えたことを表現する機会を、まるで待ち望んでいたかのように生き活きとしている。こうした高校生たちの素直な知に対する欲求を目の前にし、共に考え、語り合っていると、大人顔負けのことを彼らが普段から考えていることに、改めて気付かされる。

私が高校生のための哲学キャンプに関わるようになって、最も嬉しかったことは、ある年の高校生たちが、自らのイニシアティブで、夏と冬の合宿を通して知り合った仲間を誘い、犬島で合宿をしたとの報告をしてくれた時だった。日程を調整することから始まり、自分達で宿を取り、犬島までの行き方を調べ、両親を説得し、哲学対話をするために自主的に合宿を開く！ なんと素晴らしいことで

はないだろうか。大人がお膳立てして、哲学対話は楽しいよ、などと言わなくても、一度経験してみれば、その楽しさや面白みは彼らが一番良く分かってくれるようだ。彼らの御両親たちも、快く子供たちを、子供たちだけで開く哲学対話合宿に出してくれたのは、彼らの情熱を目の当たりにし、彼らから説得された上で納得し、許されたのだらうと推察する。

哲学対話の素晴らしい点は、つい昨日まで見知らぬ土地の見知らぬ他人同士だった高校生たちを、一泊二日の短期間で、深い友情で結ばせてしまうという点だろう。もちろん、哲学対話の、対話の密度が高ければ高いほど、考えることが深ければ深いほど、対話はより深く、素晴らしいものになるし、互いから学び、刺激を受けることも多くなる。哲学対話の、もう一つ素晴らしい点は、話したくなければ話さなくて良く、傾聴しているだけで良いというルールがある点だろう。色々と考えが深まってくると、仲間の意見に刺激されて自分の考えが浮かび、でも考えとしてまとまらず、話したいけれど、適切な言葉が見つからない……というループに陥る。こうした時に、焦る必要が無く、自分のペースで考えるので良いという、生徒個人個人の考えるペースに合わせたルールは、実に素晴らしいと思う。黙っていることに罪悪感を覚えてしまうようでは、哲学対話は決して楽しいものにならない。

高校生の哲学対話には、私はたいていファシリテーターとして参加している。ファシリテーターとして参加するにあたって、常日頃、気を付けているのは、話している者が数人に固まってしまうのでは、話題に偏りが生じて面白くないので、なるべく偏りが生じないように高校生たちの顔色を窺いながら、ファシリテートしていく点だ。真剣に考えていそうだけれど話していない子や、恥ずかしそうにしている子に、たまに敢えてボールを渡してみたりすると、意外にも良く話してくれたり、核心についたことを話してくれたりする。高校生たちの様子や顔色をつぶさに観察しつつ、ファシリテートしていくのは、一つ大切なスキルだと思う。また、哲学対話に良くありがちだが、話題が詰まってしまった時に、慌てるのではなく、対話をどのように無理なく継続させていくのか、というのも重要なスキルの一つだろうと思う。適切な問いを問いかけたり、「別の角度（立場）から考えたらどう？」など、話題を転換させたりすること、あるいは様子を見ながら沈黙を楽しむのも、重要なスキルの内の一つだろう。たまにファシリテーターだからといって対話の場をコントロールしてしまう、気負い過ぎたファシリテートをする人を見かけるが、そうした態度では対話の主体である共同体の知の探究を阻害し、対話の自由度や創造的な深まりを奪うことになりかねない。対話中

の沈黙の種類を適切に見極め、自らも過度なファシリテートをせずに、沈黙を楽しむ余裕を身につけることは大切だと思う。

ファシリテーターとして求められる数あるスキルの中で、私が個人的に最も重要なスキルだと思うのは、いかに考え方に柔軟性を持ち合わせ続けることができるか、という点だ。ファシリテーターが自分の考えに執着している場合、たいてい、高校生たちはファシリテーターの顔色を窺いながら、ファシリテーターの好む答えを探してしまうようになる（こうした傾向は、高校生の哲学対話に限ったことではない）。想像的な哲学対話のためには、ファシリテーターこそが最も柔軟な考えを持ち、どのような意見にも素直にオープンでいられることが一番、大切だと思うし、ファシリテーターとして最も大切なスキルだと思う。創造的な思考は、先入観や固定概念に囚われていては、決して生まれてこない。

哲学とは、「問い」であると思う。また、全ての学問は哲学に通じる。私は学部、修士課程を理系で通し、博士課程で文転したが、理系、文系を問わず、学問において最も重要なのは、研究対象を適切な「問い」で料理できるかどうかという点にかかっていると思う。良い「問い」は良い思考をもたらすが、「問い」が間違っていると思考は停止してしまう。「問い」こそが、新たな概念を生み出す力であり、世界を変えていく原動力になりうるのだと思う。社会人になっても、問題を発見し、問題を解決していく力は、対象に対して適切な「問い」や「疑い」を抱く力にかかっていると思う。私は「問い」の可能性を信じ、より良い「問い」出しをすることによって、未来を少しずつ変えていくことのできる力を信じ、未来からの留学生である高校生たちと、今後も哲学対話を楽しんでいきたい。

高校生のための哲学キャンプ

～ チューターの視点から

神戸和佳子

「高校生のための哲学キャンプ」は、毎年夏と冬の2回ずつ、東京で開催されているイベントである。哲学に関心をもつ全国の高校生が集まり、2日間じっくりと哲学探究に取り組む。このキャンプは、「日本倫理哲学グランプリ」とその成績優秀者が出場する「国際哲学オリンピック」の2つのエッセイコンテストに向けた、哲学エッセイの書き手養成の役割も担っている。そのため、キャンプの中心となる日中のセッションでは、エッセイの執筆指導が行われる。しかし、キャンプの目的は、単なる論述技能の向上に留まるものではない。哲学キャンプ全体が、様々な高校生がともに語り合い、問い考える方法を学び、探究を深める場となっている。

私はこの哲学キャンプに、院生チューターとして参加してきた。チューターの主な役割は、エッセイ・ライティングのセッションで、高校生が議論を組み立て、エッセイの構造を考えるための、よき対話相手となること。そして、夜の哲学対話の場をコーディネートするなど、哲学キャンプ全体が「探求の共同体」となっていくようにサポートすることだ。私たちチューターは、国際哲学オリンピック日本組織委員会の先生方のようにキャンプを企画・主催する立場でもなければ、高校生のようにキャンプに主役として参加する立場でもないから、キャンプの「意義」のようなものは語れそうにない。しかし、これまでの7回のキャンプに裏方として継続して参加してきた中で、たくさんの印象的な光景に出会い、また、私自身が様々なことを学んだ。ここでは、そうしたことを書き記しておくこととしたい。

最初のサマーキャンプは2012年8月。10名ほどの高校生が参加した。夏休みのオリンピックセンターは、真夏の太陽の下、たくさんの中高生が爽やかに活動する、健やかな青少年の象徴のような場所である。そんな中で「哲学」の看板を掲げ、薄暗い室内で黙々と文章を書きつづける私たちのキャンプは、やや場違いな感じがした。参加する高校生はもちろん、お見送りの保護者の方が、ここではどんなことをするのでしょうか、うちの子は大丈夫でしょうかと、心配そうにいらしたのを覚えている。

不安だったのはチューターも同じだ。自分では日々、哲学の論文を書いている

ものの、自分でもよい論文の書き方など皆目わからず試行錯誤しているのに、それを高校生に教えるとなると、一体何をしてよいやらと戸惑っていた。それでも梶谷先生の方針は「よい書き方を教える必要はない、とにかく高校生のエッセイでわからないことや不足していることについて問いかけ続けなさい」というもので、いつものように「うまくいかないのが当たり前」とのことだったから、とにかくわからないなりにやってみるしかないという心境だった。ちなみにこの心境は、4年が過ぎ、参加者が30名に増えた今も、あまり変わっていない。ただ、そんな不安も含めて、不完全な指導プロセスと自分の変化とを楽しめるようになったという程度のことだ。

キャンプの中心となるエッセイ執筆の指導は、国際哲学オリンピックの出題形式に則っている。まず、哲学者の書いたテキストからの数行の引用が、いくつか与えられる。そこから1つを選び、その主張を汲み取った上で、関連した問いをみずから立て、エッセイを書き進めるという形だ。ほんの数行の引用から文脈を読み取れるはずがないということもあり、テキストの解釈に拘泥するエッセイは歓迎されない。執筆の方針は、引用文に関連のある問いをきちんと立て直すということ。そして、問い・論証・結論の揃った文章を書くということだ。

とはいえ、これは難しい。それぞれの高校生が、それぞれに違ったところでつまずいてしまう。つまずくポイントをいくつか挙げてみよう。まず、文の意味がわからず、いきなり硬直してしまう。文の主張内容をまったく取り違える。文意がわかると、今度はすっかり納得してしまって、問いが立たない。あるいは、どうも納得はいかないが、なぜ納得いかないかがわからない。そもそも、問いを立てるとはどのようなことかがわからず、何も思いつかない。そんなことをしているうちに、時間だけがどんどん過ぎていく。

この段階を抜け出し、問いが立っても、その先がまた難しい。自分が立てた問いにどうやって答えていったらよいかわからない。問題が難しすぎて何も答えられそうにない。語句をすべて定義してからでないと何も論じられないような気がしてしまう。場合分けを始めてみたはよいが、基準が定まらず、うまく分けられない。あるいは、あまりにも想定される場合が多すぎて、網羅的に検討できない。また、具体例が思いつかず、抽象的な言葉が上滑りする。あるいは、具体例はたくさん思いつくのに、その意味するところがわからない。言いたいことがあるのに、それを言い当てる語彙が見つからない。こんなふうにして、思考は拡散するか膠着するかのどちらかとなり、いつまでたっても前に進まなくなる。

もっと心情的なつまずきもある。何か思いついても、「こんなものではつまらない」と感じてしまって、紙の上に書けない。せっかくのアイデアを、吟味する

こともせず、自分で棄ててしまう。自分の考えに執着するよりも、こうして棄ててしまう高校生の方が多かったように感じる。

こうした参加者の様子は、初回も今も変わらないし、大変申し訳ないことに、4年経った今でもさほど効果的な指導方法が見つかったわけでもない。チューターは毎回、紙の上で七転八倒する高校生を前に、何もしてあげられない悔しさを感じる。それは、多少程度は違って、自分の哲学探究が深まっていかないときと同じ苦しみでもある。高校生とチューターは、哲学の問いに答える（応える）とはどのようなことなのかを、エッセイの構造を組み立てながら、共に考えていくしかないのだ。

しかし、もちろん、そこにあるのは苦しみばかりではない。苦しみながらこうして考え進めていくのは、実はとても面白いことだ。高校生は、哲学がしたくてわざわざ集まっているということもあって、非常に力強い問いを立ててくる。力強いという表現が適切かどうか分からないが、このくらいの問いならうまく答えられそうだと小手先で立てた問いではなく、どうしてもそれを問わねばならないという理由あっての問いだということだ。また、彼らは、考え進めていく中で、哲学の「定石」のようなものを学んでしまった院生には思いもよらないような探究の道筋を見せてくれる。そうしたときには、そんなところに道があったのかと驚かされ、誰か偉大な哲学者と向き合っているかのように感じる。そして、ああ、本物の哲学はここにあったのだと思わせるのだ。

こうしたキャンプでの執筆プロセスを、高校生がどのように感じているかはわからない。ただ、チューターにとっては、「あなたにとって哲学するとはどのようなことか」と鋭く問われ、しかも、「ここに哲学がある」としか言いようのない若者の探究する姿を突きつけられるという、非常に刺激的で学びの多い時間となっている。

キャンプの中でもうひとつ、私が大切に感じている時間は、夜の哲学対話の時間だ。夕食と入浴を済ませた後で、参加者が自分の考えたい問いを持ち寄り、日中のエッセイ執筆よりもゆっくりと、対話的に哲学探究を行う。

最初のサマーキャンプでは、私がほんの数日前に見たばかりの p4c Hawaii のメソッドを試させていただいた。今思えば、あれは p4c とは似て非なる……というより似ても似つかない対話だったが、それでもあの日の対話は、私にとっては、哲学キャンプの原風景となって心に残っている。

あの夜、参加者が持ち寄った問いは、一見ばらばらで無関係の問いに思えた。しかも、「嘘とは何か」「なぜ世界はこのようになって別様ではないのか」といった、非常に大きな問いが集まっていた。その中で、その日の哲学対話の主題とし

て選ばれたのは「美しい文章とは何か」というものだった。この問いについて、高校生たちが自分の経験と知識を総動員して語り考えていくうちに、自然と探究が深まっていった。そして不思議なことに、その探究の中で、彼らが最初に出してくれた問いがどんどん結びついていったのだ。途中でそれに気がついたファシリテーターの私が、少し無理にそれを進めたところもあったかもしれない。ただ、もしそうだとすると、彼らが互いに、すべての参加者の問いを大切に受け止めて応答していた姿、そして、それがただ誠実な哲学探究によって実現していた様子は、非常に印象深く、今でも忘れることができない。

その後のキャンプでも、「自分に向いていることはどうしたらわかるのか」「生きることの意味はあるのか」「何のために哲学をするのか」といった、参加者にとって大切な問いについて話し合った。こうした対話はいつも予定時間を超えて続き、高校生たちは自室に戻ってからさらに対話を続けている様子だった。最近のキャンプでは、エッセイ執筆の時間に哲学対話を取り入れるようになったこともあり、夜の対話では、参加者が問いを持ち寄るという形式は必ずしも取っていない。しかし、キャンプそのものが、それぞれの「哲学者」が自分の問いを持って集まる「場」となっているように思う。

高校生もチューターも、この場に関わる人々にはみな、自分が考えずにはいられない問いを持っている。でも、本当は、そんなふうに関わりをもつというのは、世界と自分が切り離されること、自分の足場が揺らぐことであり、恐ろしく孤独なことでもある。そんな問いを互いに受け止めあい、共に探究することができるということ、そんな問いによってつながることができるということは、本当に貴重なことなのだ。

キャンプの後、「自分の問いについてみんなが真剣に考えてくれて、自分が肯定されたような気がした」「いつも一人で考えているのに、あんなふうにはほかの高校生と哲学の話ができて、これまでの人生で最高の2日間だった」と言葉をくれた参加者もいた。そんなふうに、哲学によって人がつながり、哲学によって人が自由に育っていくキャンプは、私には理想郷のように感じられる。こんな貴重な場が今後ずっと続いていくことを願うとともに、自分でも、キャンプの外に、同じように自由に哲学することのできる場をもっとつくっていきたいと考えている。

哲学のきっかけを辿って

水田 陸

はじめに

今この文章を読まれているみなさんは、どのようにして哲学に興味を抱かれたのだろうか。自身の生や正義についての疑問が湧いたのだろうか。それとも、哲学の授業や著作に惹かれたのだろうか。

筆者の場合は、高校2年時に参加した「高校生のための哲学サマーキャンプ」により、筆者の人生に哲学がひょっこり顔を出した。そして、「国際哲学オリピック選考会」で自分の学びたい哲学をつかみ、翌年もう一度キャンプに赴くことで、更に深めたい分野が増えたのである。

本文において、筆者を哲学の世界へいざなってくれた上記のイベントを改めて振り返り、何がどう心の琴線に触れたのかを確かめたい。

2014～2015年度「高校生のための哲学サマーキャンプ」

哲学サマーキャンプは2日間あり、1日目には哲学対話と哲学エッセイの執筆、2日目にはグループワークとプレゼンを行う。以下では、特に得るものの大きかった哲学対話と哲学エッセイについての省察を行う。その際、1年目から2年目への変化にも触れていく。

まずは哲学対話について。これは古今東西の哲学者の言葉を題材にして、意味の理解や解釈をした後、題材に関連した問いを出し合っていく、というものである。意見を述べている者は時間を気にすることなく話し続けることができ、気のすむまで述べ終えた後、挙手している者から次の話者を指名する。

題材は4種のうちから選べるのだが、筆者が選んだのは「門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」（一休宗純の和歌、1年目）と、「やがて死ぬけしきは見えず蟬の声」（松尾芭蕉の俳句、2年目）であった。社会問題や芸術に関しては以前から興味があったので、あえて双方とも生死観に関わるものを

据えたのである。

驚いたのは、価値観の多様性である。それも、まだ高校生の我々の間で意見が交錯するというのが面白かった。そもそも、授業であっても友達同士であっても、生死や倫理観に触れる議論などはなかなか行いう機会が無い。だが、実際その日初めて会った人であっても、トピックを深く掘り下げることや他の人の意見を聞くことで、むしろ自身の異なる意見や考えの型が見えてきて非常に新鮮であった。且つ、近い人とも深い話題をしても良いのではないかという確信さえ湧いたのである。その際批判をせず、ファシリテーター（議論の回し役）自らが参加者の意見を受け入れていたのが印象に残っている。議場ですぐ批判を飛ばし合う風景はよく見かける。しかし哲学対話には、静かな人も活発に議論する人も同様に価値観を提出し、お互いに理解できないところまで理解しようとする精神がよく表れている。意見を“戦わせる”議論を越えた、議論の形であろう。

次に哲学エッセイについて。筆者自身、これまでも作文やエッセイを書いたことはある。しかし、数時間ほどで「問い→考え→問い→考え……」といった風体の論理の筋道を立て、自分の目の前で他者からの評価を受ける、というのは初めてだった。1年目はその場で哲学対話のメンバーと、2年目は他の課題を扱ったメンバーと見比べ合う、というものであった。特に2年目においては、相手は初めて筆者が選んだ課題に取り組むことになるので、なおさら論理の明快さ（しかも生死観に関する論理において、である）が求められ、スリリングな気分を味わった。

また、以前は心の赴くままに文章を書き連ねていたが、かなり厳しい時間制限もあってか、自分が本当に示したい論考以外の考えや例は、自ら削除するようになった。特に、この哲学エッセイのトピックは哲学対話の中で出てきた問いが主であり、必然的に様々なことを書き加えたいくなるため、なおさらトレーニングになる。それにその場で削除しても他の論考では活かせる可能性があるため、草稿に書き残しておく習慣もついた。サマーキャンプを終えた現在でも、やはり哲学エッセイ形式で記述している。その方が論旨をはっきり示せるように思えるからだ。

ここで、筆者がサマーキャンプにおいて哲学に惹かれた理由をまとめておきたい。思うに、多種多様な哲学があって良い、ということである。対話でもエッセイでも、自分の論理が受け入れられ、他者からの指摘によってより一層洗練され

る感覚を味わった。正しい一つの論理体系に統合しなければならないという前提がそもそも無いため、サマーキャンプにおいて初めて哲学に触れた筆者であっても、哲学の世界に入り込むことができたのだ。

2014 年度「国際哲学オリンピック選考会」

この合宿は、「日本倫理・哲学グランプリ」で賞を頂いた生徒が集まる合宿である。もちろん哲学対話や哲学エッセイは基本構成としてあるが、大きな特徴はやはり、2 時間半に及ぶ哲学エッセイの作成であろう。

このエッセイにおいては、時間内に論旨だけでなく文章で書き上げていくため、タイムマネジメントが重要であった。また、課題文が英語である。筆者が選んだのは、“The meeting of two personalities is like the contact of two chemical substances: if there is any reaction, both are transformed.” (Carl Gustav Jung, Swiss psychiatrist and psychotherapist) であった。この一文から自分で問いを立て、論考を整理していく。更に、本文も英語で書き上げていく。筆者は確か、A4 サイズで 6~7 枚書いた。正直に言って、なかなかタイトな 2 時間半であった。

しかし、このエッセイ作成で得たものは非常に大きい。まずは、哲学の論考を英語で書き上げたという達成感である。そしてそれは、自身にとって大きな自信にもつながった。この自信は、今後筆者自身が海外進学することもある、大切なものとなるだろう。また、このエッセイによって優秀賞を頂いたことも、哲学を続けていくきっかけになった。

おわりに

こうして振り返ると、哲学イベントがどれほど筆者の学問志向に影響を及ぼしたのか、改めて気づかされる。この文章を読んでくださっている皆さんが、哲学イベントに関わるきっかけになれば幸いである。

高校生のための哲学キャンプ

榮 真由

2013年の夏、「高校生 夏休み キャンプ」と検索したのが哲学キャンプとの出会いでした。哲学がどんな学問なのか臚げないイメージしか持ち合わせていませんでしたが、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授が出ておられる番組を観たり、世界史の先生の哲学的な話を聞き興味がありました。私は地方出身なので東京行きにワクワクする気持ちと、哲学の授業についていけるか不安な気持ちのハーフハーフでした。「とりあえず黙ってわかっているつもりの顔をしておこう」と考え、1日目のセッションが行われる会場へ向かいました。

会場に着くと、全国から集まった高校生2、30人、大学院生のメンターの方が10人くらい、そして先生方々が数名おられました。簡単な説明の後、いきなり「エッセイを書いてください」といわれ、焦りました。3つのお題（哲学者たちの引用）が書かれた紙が配られ、その中の一つを選び1時間程度で書くということでした。私が気になったのは、オスカー・ワイルドによる「物事を外見で判断しないのは底の浅い人間だけだよ」という言葉でした。「外見だけで物事を判断するな」と一般によく言われる事ですし、私もそのように思っていましたので、とっさに何故だと思ふのと、全く同意できない彼の言葉にかえって釘付けにされました。思うように書くことができませんでしたが、ワイルドの言葉を自分なりに解釈しようと思いました。

エッセイ執筆時間が終わり、梶谷先生から説明がありました。ここでのエッセイは、その哲学者が何を言いたいのかではなく、自分がその引用についてどうおもうのか。まずストラクチャーというエッセイの骨組みになるものを立てます。はじめに大きな「問い」を立てるということでした。「問い」とは自分が読んだ引用で一番気になった部分、そのことについてじっくり考えてみたいとおもうことです。その大きな問いに答えるために、三つほど中位の問いを立てます。またその中位の問いの下にいくつか例や理論を書き出し、自分の考えをまとめるということでした。

二人の高校生につき一人のメンターさんがついてくださりエッセイの見直しを共にしました。ワイルドが何を言いたいのかを書いて、自分のエッセイが読者に何を伝えたいのかわからないただ単の感想文でした。私についてくださったメンターさんと自分は何が気になるのかを考え、思いつくままに紙にリストしました。その中から大きな問いを見つけ、その他の共通している考えをその下に並

べ、結論を作りました。

ストラクチャーを作り終わったあと、参加者一人一人自分の考えを発表しました。私が選んだ課題について話している人も多かったです。皆それぞれその課題に違う観点から向き合い、内容は十人十色でした。

私は「外見で判断するのは浅いのか」という大きな問いをたて、「浅くない。深いと言う事はあからさまに見えない事に関しても慎重に情報を得て、考えた上で結論を確実なものにすると言う事です。」という結論をだしていました。今でもその時に書いたメモは大事にとってあります。見直すと苦笑いしてしまいますが、終わった後にメンターさん方々や他の高校生から「じゃあここはどう思う？」など自然な対話が始まりました。

夜のセッションでは皆大きな輪になって座り、それぞれ話してみたいトピックを上げ、多数決で語る内容を決めました。もじゃもじゃボールのような物を使い、そのボールを持っている間自分の考えや前に出た発言に対しての疑問を述べ、次に手を上げた人にパスしていくという方法でした。私の周りの人とは同じような方向性で話が進むため、普段顔を合わせない方々と意見を交わす事によって自分の思考の浅さを感じつつ、「もっと対話から学びたい」という気持ちになりました。セッションが終わった後も高校生同士と話が続きました。内容は科学、歴史、政治的な事や、世界が注目している倫理的問題、自分たちの進路についても話し合いました。

二日目は東京大学の駒場キャンパスに移動し、その日はグループごとに考え、発表するという内容でした。一グループあたり4、5人高校生に2人のメンターさんがついてくださりました。グループごとにどのお題について考えるか決め、それぞれ気になる事を言い合い、思い浮かぶことや疑問をホワイトボードに書き出しました。自分の発言に対する反論もありますが、自分の主観に客観性を加えられることで、より違う観点を得ることができました。中々皆が同意できる結論を出すのが困難ですが、じっくり仲間と考えるのは一人で考えるのよりもより深く洞察することができました。

昼から各グループごとにストラクチャーを使って発表しました。私達のグループはパウル・ティリッヒの『生きる勇氣』に書かれてある信仰に関してのお題を選び、信仰、勇氣と自己肯定の関係性について発表しました。発表後は他のグループの高校生やメンターの方々からの質疑応答の時間があり、自分達の主張を弁護しきれない局面もあり、課題を感じました。発表の後は閉会式が行われ、国際哲学オリンピック、また日本倫理哲学グランプリについての説明があり、解散時間になりました。

家に帰り、入賞したら冬の選考会に行けるという事なので駄目元でエッセイを

書き始めました。書き始めてから一ヶ月以上エッセイを書く時間がありましたが、中々アイデアが思いつかないまま時間は過ぎてしまいました。考えてはそれに対しての反論を考え、削っては書き直し、初めての哲学エッセイは中々進みませんでした。一ヶ月後、審査結果が発表され冬の選考会へ参加させてもらえることになりました。

冬の選考会には全国から入賞した高校生が10人ほど集まりました。一日目は夏のキャンプとほぼ同じ流れでした。その日は選考会というよりも合宿感覚で、あまり緊張感もなく対話が進み、新しい友人も増えました。

選考会となるエッセイ執筆は二日目に行われ、前日の雰囲気とはガラリと変わり緊張感が走りました。エッセイ執筆時間は2時間半。執筆言語は英語。タイムリミット、また議論する相手がいない、また外部のソースをつかえないというチャレンジに追われましたが、多角的に学び、洗練された表現力を培っていきたいと思うきっかけとなりました。

様々なバックグラウンドや価値観を持っている人と話す事により、自分の知らない世界の事を学ぶ事ができると思います。北垣先生が選考会でおっしゃった「考える事で世界は変わる」という言葉がすごく自分の心に響いたのを覚えています。人は全ての文化や経験を共有する事は不可能ですが、伸縮性、柔軟性を持つという事が対話の重要なスキルであり、見え方が変わる要素だと思います。以上の事が哲学キャンプを通して学べた事です。

